

活動記録

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二十七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は187頁に掲載）。

研究室の構成メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の博物館・資料館の学芸員や職員、市町の文化財担当者、大学研究者、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いで成り立っている。

本年度の副室長には、昨年度までの筆保慶一前次長にかわり、新任の神足孝明次長が就いた。コア会議メンバーに大國正美神戸新聞社常務取締役（神戸深江生活文化史料館長）

が顧問として加わった。また中村弘研究員が昨年度まで属していた『播磨国風土記』研究班から転入した。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の甲斐昭光課長で、そのもとに本年度は二名の文化財課職員が、各班の補佐役を担当した（柏原正民副課長兼文化財班長と大本朋弥主任）。また昨年度まで補佐役だった小川弦太主任は、兵庫県立考古博物館の主任として転出し、その立場でたたら製鉄研究班の研究員になった。

また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・事務スタッフ（長澤喜史県政推進事務員）の各一名を配置し、研究室は現在、総勢三九名で構成されている（188頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

開設初年度、研究の基本方針を討議するコア会議、全体会議の開催を経て、室の当面の研究テーマを、

①『播磨国風土記』、

②赤松氏と山城、

③たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班が編成された。

平成二十七年度は、編纂一三〇〇年記念を迎えた『播磨国風土記』研究、二八年度は、赤松氏と山城研究、二九年度は、たたら製鉄研究に集中的に取り組んだ。開設四年目以降は、とくに重点的な研究テーマを立てていない。

ただし平成三〇年度から、研究室の全体方針を掲げ、本年度は、「六年間の研究成果を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターと淡路島日本遺産委員会との連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

本年度も残念ながらコロナ禍のもと、一昨年度までのような順調な活動をすすめることができなかった。

第一に、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。これにより『播磨国風土記』研究班の調査件数は昨年度と比較して八割減、赤松氏と山城研究班のそれは六割減になった（186頁の現地調査等一覧を参照）。

第二に、外部の協力組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの対面による合同事業をほとんどできなかった。

このうち淡路島日本遺産委員会との共催行事、ひょうご歴史研究室 in 淡路島Ⅳ（淡路市内で開催予定）は、二年連続中止に追い込まれた。唯一対面で開催できた市民向け企画は、八月一日の日本遺産記念シンポジウムだけであった（県立考古博物館にて開催。応募した市民一三〇名の応募があり、抽選により六四名が参加）。

第三に、コア会議と三つの研究班の研究会のすべては、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形

式でおこなわざるを得なかった。ただしこの形式は、普段なら顔を出せない遠方の研究員も気楽に参加でき、かえって討論が活発になるというメリットも生んだ。

第四に、昨年度から二年間限定で着手した「鳴門の渦潮」調査プロジェクトに関する個人現地調査をほとんどできず、研究期間を一年間延長することが決められた。

以下、三つの研究班と「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの研究活動と成果を簡潔に紹介する。

なお各班の研究会和調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの調査・研究活動内容については、185頁の一覧表を参照のこと（本誌第六号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

一、『播磨国風土記』研究班

(1)体制と研究方針

コア会議に転出した県立考古博物館の中村弘館長補佐兼企画広報課長に代わり、同館の池田征弘学芸課長が研究員に加わった。昨年度と同様、合わせて一〇名のメンバーで構成された。

第一回研究会で、研究方針を昨年度と同様、「『播磨国風土記』調査研究を持続させるとともに、関係する自治体関係者との信頼関係を確立した上で、広く県内各地の古代史研究にも着手する」とすることが確認された。研究会はハイブリッド形式で合わせて三回開いた（185頁の研究会一覧参照）

ただしコロナ禍のもと、フィールド調査活動を十分にできず、コロナ禍の間を縫って合わせて三回の調査に留まった。

その一方で昨年度から進めている神戸新聞総合出版センターから刊行

される『播磨国風土記』の古代史』の論文合同研究会の開催に注力し、オンライン形式の研究会を合わせて二五回以上開催した（一昨年の三月以降）。本年度の研究成果は、以下のとおりである。

(2)研究成果の公表

①『播磨国風土記』の古代史』の刊行

『播磨国風土記』研究班の本年度最大の成果は、本書を刊行できたことである。

□兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編

□坂江渉監修

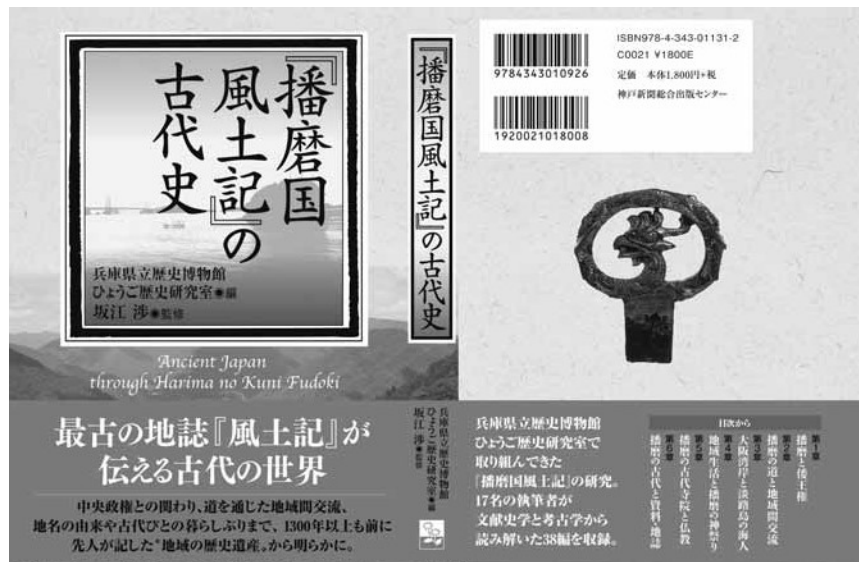
□令和三年一月二〇日発刊

□神戸新聞総合出版センター刊

□総ページ二七〇頁

□三八編の論考、一七名の執筆者

□定価は税込み一、九八〇円。



これまで連携してきた島根県古代文化センターと淡路島日本遺産委員会のメンバーの執筆も得て、充実した内容となった。本書の刊行を区切りとして、本年度三月、当班は発展的に解消し、新しいテーマの研究を始めることが決められた。

②「ふるさとの歴史講座神戸校」の歴史講座への協力

元副室長の豊田幸雄氏の紹介で、昨年度から始まった公益財団法人・兵庫県芸術文化協会の「令和三年度兵庫県生活文化大学」の歴史講座の開催に、本年度も研究室が共催団体として協力した。

テーマを「神戸・阪神間の古代史(Ⅱ)」として、合わせて一〇回の講演会を開く予定であったが、コロナ禍のため計九回の内容に変更された(184頁参照)。毎回の参加者は約五〇人程度である。

③日本遺産「国生みの島・淡路」認定5周年記念シンポジウム

「考古学と文献史学からみた古代の淡路―海人と国生み神話」の開催

□令和三年八月一日(日曜日)

□兵庫県立考古博物館講堂

□講演

・伊藤宏幸（共同研究員、淡路市教育委員会職員）「淡路の海人と渡来人」

・坂江渉（研究コーディネーター）

「国生み神話と淡路の海人」

□二つの講演後、約一時間のパネルディスカッションをおこない、六四名の市民が参加した。

④本誌での論文執筆

伊藤宏幸共同研究員と坂江渉研究コーディネーターが本誌論文を執筆した。また昨年度来、連携関係がつづいている岡山県教育庁文化財課文化財保護班の上栲武主幹、また北海道教育大学教育学部釧路校の中村太一教授にご協力を仰ぎ、それぞれに古代の製鉄に関する論考、昨年度の『研究室紀要』の「播磨の道」特集に関する書評を得ることができた。

そのほか連携団体の淡路島日本遺産委員会からは、浅井伸行南あわじ市教育長に歴史遺産活用に関する論

考を執筆いただいた。

二、赤松氏と山城研究班

(1)体制と研究方針

新たなメンバーに、武庫川女子大学短期大学部共通教育科の古野貢准教授が客員研究員として加入し、総勢一二名の構成になった。

研究方針は昨年度と同じく、「たつの市と連携して、城山城の構造について古代・中世の両側面から調査研究するとともに、前期赤松氏の動向について幅広く資料収集・分析をはかる」とした。

このもとで城山城の現地調査や表採遺物の整理、赤松氏関連の文献史料調査、赤松居館跡の発掘調査の取りまとめへの協力をおこなうなどの計画を立てた。しかしコロナ禍の影響で十分な活動はできなかった。研究会は二回開催した（令和四年一月末現在）。研究成果は以下のとおりで

ある。

(2)研究成果の公表

①『上郡町埋蔵文化財発掘調査報告

三 赤松居館跡1』（令和三年三月三十一日刊行）への協力

当班が全面協力して、平成二八年度から三〇年度にかけて国庫補助事業として上郡教育委員会が実施した赤松居館跡範囲確認調査の報告書が刊行された。本書の刊行が赤松氏と山城研究班による最大の研究成果である。

研究班ではこの成果も踏まえて、来年度中、前期赤松氏の支配拠点に関する総括的議論とその情報発信をおこなう予定である。

②『神戸新聞』への取材協力

『神戸新聞』の連載欄「はりま歴史新聞とりでの記憶」に関して大村拓生歴史研究推進員が取材を受け、「赤松則祐」（八月二一日付）「赤松政則」（九月四日付）「櫛橋氏」（一〇月

二日付)として、そのコメントが掲載された。

③本誌での論文執筆

大村拓生歴史研究推進員が、本誌に赤松氏関連の論文を執筆した。

三、たたら製鉄研究班

(1)体制と研究方針

構成メンバーは昨年度と同じく一〇名で、昨年度と同様、「宍粟市と共
同して、考古部門と文献調査部門の
基礎的研究をすすめる」という方針
のもと研究をすすめた。研究会は合
わせて二回開催した(令和四年一月
末現在)。

現地調査は二回おこない、いずれも県外の製鉄関連遺構を訪ねた。岡山県美作市の下坂遺跡と大阪府交野市の森遺跡、車塚古墳群などの調査がそれである。この調査は第二回研究会での松尾充晶研究員(島根県古代文化センター)の報告内容が大き

な契機となった。

下坂遺跡の現地調査では、岡山県教育庁文化財課文化財保護班の上村武主幹、交野市の森遺跡、車塚古墳群の現地調査では、同市教育委員会生活学習推進部社会教育課(文化財担当)の真鍋成史課長の案内のもと、充実したフィールドワークをすることができた。

当班の研究成果は、つぎのとおりである。

(2)研究成果の公表

①本誌での論文執筆

大槻守客員研究員が本誌で天児屋鉄山に関する論文を、また土佐雅彦客員研究員が『山方役所勤方覚書』(当館所蔵)の翻刻を、笠井今日子共同研究員がその解説論文を執筆した。

②航空レーザー測量による遺跡分布調査研究の進展

本年度から、たたら製鉄遺跡を調査発見する方法の一つとして「航空

レーザー測量」の成果を活かすことを決めた。合わせて二回の小研究会を通じて、かなり研究進展を得ることができた。来年度以降、この成果を活かした現地調査をする予定である。

四、「鳴門の渦潮」調査研究

プロジェクト

①研究員の個別調査研究

コロナ禍により、研究員の個別調査研究はほとんど進捗しなかったが、今後の計画を調整する会議を、令和三年七月に開催した(鳴門市)。またその際、鳴門の渦潮や徳島県の福永家住宅などの現地調査もおこなった。それを受けて研究の見通しや方向性などを相互に示す合同研究会を一〇月に開催した(洲本市)。そこで最終報告書の『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産(仮称)』を令和五年二月に刊行することが決められた。

②『淡路島文化財総合調査報告書(一

九八八二〇〇〇)』の刊行

一九八八年から二〇〇〇年まで、当館学芸員がおこなった淡路島の文化財総合調査の調査目録カードをデジタル化する作業を、臨時職員の福永明子氏が昨年度八月からすすめてきた。その成果がまとまり、令和三年一月二八日付けで発刊された。

総ページ八八頁で成り立ち、合わせて二〇〇冊刊行し、淡路島各地の歴史遺産活用に資することになった。ただし本書は個人情報が多く含まれており、あくまで学術目的で刊行し、一般公開はしていない。

五、研究室ホームページ

研究室では平成二七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを独立して開設した。しかし本年度から博物館全体のホームページに

統合して運用し始めた。催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や研究成果を取り上げている。

コロナ禍のもと昨年度から、新たに「研究員のリレートーク」をアツプし、市民向けの情報発信につとめている。令和四年一月末段階で、合わせて二一名が登場し、興味深い話が載せられている。詳細はホームページをご覧ください。

六、今後の方向性

ひょうご歴史研究室は開設以来、まもなく八年目を迎えようとしている。『播磨国風土記』研究班は、書籍の刊行を一区切りにして、今年度末で発展的解消と決められた。新たな研究班も含め、行政的課題に如何に答えるか、博学連携や学芸課との連携をどうすすめるかなど、来年度以降の方向性について、各班とも現在模索しているところである。

主催：公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
共催：兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

ふるさとの歴史講座 神戸校

神戸・阪神間の古代史(Ⅱ)

昨年度に引き続き、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室がプロデュースして、「神戸・阪神間の古代史」を扱います。前半は、海やミナトに関わる講演、後半は、六甲山系や内陸部に関わる講演が中心となります。

【会場】兵庫県民会館3階303号室

※6/14は生田文化会館大ホール（神戸市中央区中山手通6丁目1-40）

※7/19・9/13・11/8・1/17・2/7は兵庫県学校厚生会館 2階大会議室（神戸市中央区北長狭通4-7-34）

※10/4・12/6は兵庫県民会館 けんみんホール

※2月の会場は調整中

【時間】午後2時30分から4時まで（月曜日）

【年間受講料】一般：15,300円 ※友の会会員：11,700円（令和3年5月17日変更）

※県立美術館「芸術の館 友の会」、県立歴史博物館友の会会員も対象

【日程等】10回⇒9回に変更

	実施日	講座内容	講師	会場
①	4月12日(月)	神戸・阪神間の海辺の古墳	奈良文化財研究所客員研究員 (元神戸市埋蔵文化財センター所長) 渡辺伸行	兵庫県民会館 3階303号室
②	6月14日(月)	凡河内氏と大阪湾岸	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃	生田文化会館 大ホール
③	7月19日(月)	敏売崎の外交儀礼 -倭王権からみた西撰-	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉	兵庫県学校厚生会館 2階大会議室
④	9月13日(月)	古代・中世の大輪田泊	ひょうご歴史研究室 歴史研究推進員 大村拓生	兵庫県学校厚生会館 2階大会議室
⑤	10月4日(月)	猪名と尼崎の立花 -タジマモリ伝承との関連で-	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃	兵庫県民会館 けんみんホール
⑥	11月8日(月)	兎我野と夢野 -シカのみた夢-	ひょうご歴史研究室客員研究員 (立命館大学非常勤講師) 高橋 明裕	兵庫県学校厚生会館 2階大会議室
⑦	12月6日(月)	信仰の山、六甲山	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉	兵庫県民会館 けんみんホール
⑧	1月17日(月)	武庫国と羽束国	ひょうご歴史研究室客員研究員 (立命館大学非常勤講師) 高橋 明裕	兵庫県学校厚生会館 2階大会議室
⑨	2月7日(月)	近世名所図絵からみた「古代史」	神戸深江生活文化史料館長 (神戸新聞社常務取締役) 大国正美	兵庫県学校厚生会館 2階大会議室

※ 都合により日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

【問い合わせ】

公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4-16-3

TEL (078) 321-2002

FAX (078) 321-2139

e-mail: sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和2年度（承前）～令和3年度 「ひょうご歴史研究室」研究会一覧（敬称略）

コア会議

	日付	場所	内容	人数	備考
①	4/24(土)	ハイブリッド形式	令和2年度の活動実績と今後の取組方針等について	13	
②	12/5(日)	ハイブリッド形式	令和3年度の事業と令和4年度以降の事業の方向性等について	13	

『播磨国風土記』研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	6/13(日)	ハイブリッド形式	・内田律雄（海洋考古学会代表） 「『出雲国風土記』にみる海人一墓や信仰との関わりで」 ・浦上雅史（元洲本市立淡路文化史料館館長） 「古代淡路島の海人の墓—沖ノ島古墳群を中心に—」	25	
②	10/2(土)	ハイブリッド形式	・伊藤宏幸「淡路島の製塩土器研究の成果と課題」 コメント ・多賀茂治（兵庫津ミュージアム班長）	21	
③	12/11(土)	ハイブリッド形式	・松尾光晶（島根県古代文化センター専門研究員） 「5世紀の出雲と韓半島—淤宇宿祢が赴いた韓国は何処か—」	18	

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7/3(土)	ハイブリッド形式	・山上雅弘「播磨城山城の構造と評価」 ・島田 拓「赤松居館跡発掘調査のまとめ・展望」	18	
②	10/24(日)	ハイブリッド形式	・新谷和之（近畿大学文芸学部文化・歴史学科 准教授） 「近江六角氏の拠点形成」 ・大村拓生「室町期赤松一族の構造」	15	

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	6/19(日)	ハイブリッド形式	・今後の調査研究の方向性について	17	
②	11/27(土)	ハイブリッド形式	・大道和人（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課 副主幹） 「近畿地方からみた古代播磨の製鉄」	19	
（小研究会）					
①	8/7(土)	ハイブリッド形式	・航空レーザー測量による遺跡分布調査について検討	8	
②	12/25(土)	ハイブリッド形式	・航空レーザー測量による遺跡分布調査について検討	11	

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7/24(土)	鳴門市、南あわじ市	大鳴門海峡の渦潮見学、前近代における大鳴門と小鳴門海峡をめぐる航行ルート、宿駅の配置、山城の配置等の調査等	16	
②	7/25(日)	南あわじ市	「鳴門の渦潮」と淡路島島内の砂嘴・砂州形成との関わりの調査	4	
③	10/30(土)	淡路県民局	第3回合同研究会	17	
④	10/31(日)	洲本市	成ヶ島の漂着物情報のほか、由良の「テグス糸」に関する聞き取り調査	3	

令和2年度（承前）～令和3年度
「ひょうご歴史研究室」現地調査等一覧

『播磨国風土記』研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	2/19(金)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	出土遺物の熟覧調査
	3/10(水)	現地調査	姫路市埋蔵文化センター、辻ケ内遺跡他	2	資料調査と現地調査
	3/20(土)	資料調査	大阪府立近つ飛鳥博物館、観心寺霊宝館	1	資料の閲覧と複写
	3/25(木)	現地調査	万丈寺山廃寺(姫路市)、上野遺跡、多田廃寺	2	古代播磨の道と寺の立地環境調査
①	6/15(火)	現地調査	成相寺(宮津市)、京都府立丹後郷土資料館他	1	資料調査と現地調査
②	9/19(日)	現地調査	新舞子浜(たつの市)、伊和神社(宍粟市)他	1	現地調査と撮影
③	11/13(日)	資料調査	大阪歴史博物館、明石市立文化博物館	1	資料の実見

赤松氏と山城研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	1/30(土)	現地調査	たつの市立埋蔵文化財センター、城山城他	3	遺物実見と現地調査
	2/20(土)	現地調査	城山城、たつの市立埋蔵文化財センター	9	現地調査と資料調査
①	7/23(金)	現地調査	上郡町内の史跡、上郡町郷土資料館	2	史跡調査と資料調査
②	8/26(木)	現地調査	坂本城跡(姫路市)、圓蔵寺、姫路市書写の里美術工芸館他	1	現地調査と資料調査
③	10/7(木)	現地調査	石清水八幡宮領松原荘・継荘(姫路市)の故地	1	立地と地形の確認調査

たたら製鉄研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
①	11/16(火)	現地調査	下坂遺跡(岡山県)、旧和気郷、和気神社他	5	現地調査と撮影
②	12/28(火)	現地調査	交野市立教育文化会館、磐船神社、車塚古墳群他	4	出土資料の熟覧と現地調査

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

(設 置)

第1条 兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。)を置く。

(場 所)

第2条 研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

(所掌事務)

第3条 研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

- (1)兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。
- (2)調査・研究成果の普及に関すること。
- (3)調査・研究成果の活用に関すること。
- (4)その他兵庫県の歴史研究に関すること。

(組 織)

第4条 兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

- 2 室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

(庶 務)

第5条 研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

(補 則)

第6条 この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。

令和3年度 ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

(敬称略)

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】(13名)

室長	藪田貫	兵庫県立歴史博物館 館長
副室長	神足孝明	兵庫県立歴史博物館 次長
参事	中元孝史	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧問	山下国史	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)
☆ 顧問	坂江正	神戸新聞社 常務取締役
研究コーディネーター	大坂江	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
歴史研究推進員	大村拓生	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
共同研究員	大谷輝彦	姫路市埋蔵文化財センター 館長 [2年目から]
共同研究員	山上雅弘	兵庫県まちづくり技術センター 技術専門員
協力研究員	村上泰樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 次長
研究員	中村弘	兵庫県立考古博物館 館長補佐兼企画広報課長 [4年目から]
県教委事務局	甲斐昭光	兵庫県教育委員会事務局文化財課 課長
県教委事務局	柏原正民	兵庫県教育委員会事務局文化財課 副課長兼文化財班長

【『播磨国風土記』研究班】(10名)

◎ 研究コーディネーター	坂江涉	再掲
客員研究員	古市明	神戸大学大学院人文学研究科 教授
客員研究員	高橋裕	立命館大学文学部 非常勤講師
共同研究員	大谷輝彦	再掲
共同研究員	伊藤宏幸	淡路市教育委員会社会教育課 [5年目から]
研究員	神戸佳文	兵庫県立歴史博物館 社会教育推進専門員
☆ 研究員	池田征弘	兵庫県立考古博物館 学芸課長
協力研究員	垣内章	播磨学研究所 研究員 [2年目から]
協力研究員	大平茂	元三木市立金物資料館館長
県教委事務局	大本朋	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主任

【赤松氏と山城研究班】(12名)

◎ 共同研究員	山上雅弘	再掲
☆ 客員研究員	古野貢	武庫川女子大学共通教育部共通教育科 准教授
共同研究員	田村正孝	大手前大学史学研究所 研究員 [3年目から]
共同研究員	中井淳史	兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科 教授 [4年目から]
共同研究員	藤木透	佐用町教育委員会教育課企画総務室 副室長
共同研究員	大谷輝彦	再掲
共同研究員	島田拓	上郡町教育委員会教育総務課総務・文化財係 係長 [2年目から]
共同研究員	義則敏彦	たつの市教育委員会歴史文化財課 専門員
研究員	永惠裕	兵庫県立考古博物館 主任
研究員	竹内信	兵庫県立歴史博物館 学芸員
歴史研究推進員	大村拓生	再掲
県教委事務局	柏原正民	再掲

【たたら製鉄研究班】(10名)

◎ 協力研究員	村上泰樹	再掲
客員研究員	大槻守	香寺町史研究室主宰
客員研究員	岩城卓二	京都大学人文科学研究所 教授 [4年目から]
客員研究員	土佐雅彦	前兵庫県立篠山東雲高等学校教諭 [3年目から]
研究員	藤田淳	兵庫県立考古博物館 社会教育推進専門員
共同研究員	伏谷聡	兵庫県企画県民部管理局文書課文書管理班 会計年度任用職員
共同研究員	田路正幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課 専門員
共同研究員	笠井今日子	西宮市立郷土資料館 学芸員 [2年目から]
研究員	吉原大志	兵庫県立歴史博物館 主任 [4年目から]
研究員	小川弦	兵庫県立考古博物館 主査 [3年目から]
県教委事務局	柏原正民	再掲

県政推進員 長澤喜史 兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

※ ☆新メンバー、◎リーダー

【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】

座長	藪田 貫	ひょうご歴史研究室 室長
委員	坂江 渉	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター
委員	古市 晃	ひょうご歴史研究室 客員研究員
委員	大村 拓生	ひょうご歴史研究室 歴史研究推進員
委員	山上 雅弘	ひょうご歴史研究室 共同研究員
委員	木村 修二	神戸大学大学院人文学研究科 特命講師
委員	福家 清司	徳島県埋蔵文化財センター 理事長
委員	磯本 宏史	徳島県立博物館 学芸員
オブザーバー	山下 史朗	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会

臨時職員 福永 明子

執筆者紹介

- ・藪田 貫 (やぶた・ゆたか)
ひょうご歴史研究室長
- ・伊藤 宏幸 (いとう・ひろゆき)
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・上栴 武 (うわがき・たけし)
岡山県教育庁文化財課主幹
- ・坂江 渉 (さかえ・わたる)
ひょうご歴史研究室研究コーディネーター
- ・大村 拓生 (おおむら・たくお)
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
- ・大槻 守 (おおつき・まもる)
ひょうご歴史研究室客員研究員
- ・前田 徹 (まえだ・とおる)
兵庫県立歴史博物館主査・学芸員
- ・笠井今日子 (かさい・きょうこ)
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・土佐 雅彦 (とさ・まさひこ)
ひょうご歴史研究室客員研究員
- ・浅井 伸行 (あさい・のぶゆき)
南あわじ市教育長
- ・神戸 佳文 (かんべ・よしふみ)
ひょうご歴史研究室研究員
- ・中村 太一 (なかむら・たいち)
北海道教育大学教育学部釧路校教授

編集後記

昨年度に引き続き歴史研究室はコロナ禍での活動を余儀なくされ、研究会も遠隔会議システムを使つての開催が続いています。県外の研究者に気軽に参加していただくというメリットもありますが、回線トラブルもあり、何気ない雑談や終了後の延長戦ができなくなったことは、大きな痛手です。フィールド調査の予定でも延期・中止になったものがあります。

それでも研究報告のいくつかを論文として掲載することができ、たたら製鉄研究班の地道な調査に基づく成果もあります。また以前からの淡路島日本遺産委員会との連携に加え、昨年度から「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトがはじまったこともあって、淡路島の文化遺産に関する多様な論考が集まりました。歴史研究室も七年がたち、全県的な活動に向けての議論も始まっています。情報発信にも努めますので、引き続きのご支援を皆様に心よりお願いする次第です。(大村拓生)

ひょうご歴史研究室紀要 第七号

令和四年(二〇二二)三月三〇日発行

編集・発行 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室

(編集担当・坂江渉、大村拓生、長澤喜史)

〒六七〇―〇〇〇二 兵庫県姫路市本町六八番地

電話 〇七九―二八八―九〇一一

HP <https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/>

印刷 刷合名会社 柳生印刷所

〒六七二―一五六―一 兵庫県揖保郡太子町鶴五六八

電話 〇七九―二七六―〇〇四八